

〈一般研究課題〉 断層沿いに立地する神社とその周辺環境に関する研究  
助成研究者 名古屋工業大学 是澤 紀子



## 断層沿いに立地する神社とその周辺環境に関する研究

是澤 紀子  
(名古屋工業大学)

### A Study on Shinto Shrines and their Settings located along the Fault

Noriko Koresawa  
(Nagoya Institute of Technology)

#### Abstract

The purpose of this paper is to examine significance of an environmental index on geographical and geological conditions in Shinto shrines. A study on earthquake recognition before modern age reveals that an image of alignment linking with some places on earthquake damage had been expressed in words like “suji” 筋 and “myaku” 脈. The geographical and geological conditions of Shinto shrines along the fault shows that these shrines are constructed on the escarpment of not only the basement rock but also the covering layer bulged by the fault. This means that Shinto shrines along the fault, which especially located on the escarpment of the covering layer, could represent the environmental index of marking on a noteworthy place. Such environmental indices could be inherited by preservation in Shinto shrines with their settings including behind forests.

#### はじめに

神社の景観は、建造物とその周辺環境が一体となって成立している。これまで筆者らは、この一体的な景観の保全につながる評価手法を導出するため、神社周辺の「断層」や土地本来の「植生」に着目することで、自然環境条件の指標化（以下、自然環境条件の指標を環境指標と称す）を試みてきた<sup>1</sup>。この背景には、近年、文化的景観の保護や歴史的風致を維持するための制度が、たてづけに創設されたという現状がある。その運用にあたり、今後対策すべき景観保全のシステムや、評価手法の確立が急務になっているのである<sup>2</sup>。

筆者らが着目してきた「断層」や「植生」は、景観を特色づける土地固有の性質である。これは土地に潜在する地理的及び気候的な特性と言えるもので、かつ土地に対する人為的な造成が進むほど、目で読み取ることがより困難となる特性でもある。土地の性質としては、ほかにも「地形」や「地層」など様々に挙げることができよう。従来、景観を記述する場合、視知覚現象として捉える立場が主流であったが、この立場からだけではこの土地の性質を十全に知ることはできない<sup>3</sup>。興味深いのは、多くの神社がこの性質を継承することで歴史的な景観を保持してきたことである。この特性のもと、環境指標を導出しようとしてきたのが、従来の筆者らの研究目的である。

ひきつづき本稿では、この断層がしばしば地震を引き起こすことに留意することで、土地の性質から神社の景観について新たな考察を加えたい。このことに関連して、土地の性質と信仰との関係について民俗学の立場から論じた野本寛一氏<sup>4</sup>は、地震や風水害などの自然環境が信仰の基盤となることを指摘し、このようなものとして土地特有の気候や気象、地質や地形、動植物などを挙げている。また、自然現象による災害を日本史学の立場から位置づけた水野章一氏<sup>5</sup>は、中世の災害対応を宗教的対応、工学的対応、農学的対応、社会的対応にわけ、多角的に論じている。このような指摘のもと本稿では、断層と地震との関係をみるにあたり、大きく二つの枠組みから当時の人々の知識の枠組みを検討したい。一つは〈自然科学的〉なものであり、もう一つは非科学的な伝承などにもとづく〈物語的〉なものについてである。この定義のもと、まず、過去に起きた地震に対する当時の人々の認識と、神社の立地との関係にみられる特質を整理する。そして、歴史的都市を断層が貫く具体的な事例として、京都市花折断層南部周辺地域に立地する神社を取り上げ、軟弱な地盤に立つ神社における環境指標の評価を試みる。最後に、以上をもって神社の立地とその意義について考察する。

## 1. 過去の事例にみる土地の性質とその認識をめぐって—地震の認識と対策の事例を中心に

断層は、地震源や被害を考えるうえでの土地が持つ性質の一つとして知られている。断層以外にも、地滑りや地割れ、地表を覆う堆積物などの地震の痕跡があり、これらが地形や地層に標されて、その土地固有の性質が形成される。以上を前提に本章では、過去の地震の事例から、土地の性質に対する当時の人々の認識と、地震に対する方策について瞥見したい。

まず、〈物語的〉対応についてみると、地震と信仰との関係において、自然環境のもたらす現象を鎮めるために神を祭ることが、古来よりしばしば行われていた。これは例えば『日本書紀』推古天皇七年四月二十七日条の記述、「地動、舍屋悉破、則令四方俾祭地震神」<sup>6</sup>からも裏付けられる。このことから当事者たちは、地震に対して何かしらの認識をもち、かつ環境上の対策をとるよう配慮していたと考えられる。では実際に、どのように人々は地震を認識していたのであろうか。

ここで、日本史学の立場から歴史地震学研究に携わった山本武夫氏による先行研究<sup>7</sup>を中心に整理しておきたい。古代及び中世の地震認識とその対応にみられる特徴のひとつに、地震を神の仕業として理解する思想とともに、地震占や改元<sup>8</sup>にまつわる行事など、陰陽五行説などの外来思想からの影響を認められるものがある。また、次第に国政とのかかわりのもと〈物語的〉対応がとられていくようになっていく。たとえば、(1) 地震神をまつる（推古期における儒教的対策導入以前）、(2) 諸社に奉幣し天下の平安を祈る、(3) 鎮護国家の具であった仏教によって大般若経転読などに

より災気を鎮める、といった、神・儒・仏混合の観点による対応である。

以上をふまえここで、全国に多数分祀されている鹿島の神社に注目したい。『鹿島宮社例伝記』には「常州殊地震難繁國、石ノ御座有ケルニヤ、為地震不動ノ故ニ、於當社地震不動」<sup>9</sup>と、神社の「石」、すなわち要石が地中の鯨を鎮め、地震被害をくいとめる象徴として捉えられていたということがわかる。ここで〈物語的〉対応の事例をうかがえるが、注意したいのは、この事例がすべての場合にあてはまるものではないことである。

鹿島神社の全国分布と地震発生との関係について調査をした地震学者の都司嘉宣氏<sup>10</sup>によれば、地震信仰のある鹿島神社と、地震信仰のない鹿島神社とが存在するという。例えば、全国の鹿島神社のうち少なくとも半数以上が分祀したとされている茨城県鹿島郡鹿島町の鹿島神宮では、当初から地震神の性格を備えていなかったことがわかる。一方、鹿島神宮と要石や地震信仰との関係がうかがえるものとして、保元2年（1157）に分祀した熊本県竜王町の鹿島神社が知られる。この竜王町のもは、地震信仰を伴った分祀として知られる最古の事例である。このことから12世紀半ば頃までには、鹿島神宮のなかにも地震神としての性格を備えるものが登場するようになったと考えられている。

また、都司氏らは地震信仰を伴う要石があり、かつ鹿島の神として認識されている神社9か所を取り上げて、これらの神社が地震や津波に対して安全な土地に立地する理由を考察している。そして、近世に創建された神社ではあるが、静岡県清水市袖師の鹿島神社や和歌山県南部の鹿島神社を事例に、過去の地震に対する被害実績や地質調査、地盤の硬さを示すN値分布、地下水位等の指標、津波の電波図から、地震や津波の被害が大幅に少なくなる条件を備えた場所に神社が存在することを明らかにした。そのうえで、当時の人々が過去の地震被害などを受けて、その土地を地震に強い土地であると経験上認識したことで、そこに地震信仰をともなった鹿島神宮が分祀された可能性を指摘している。要石と地震信仰を伴う鹿島神社は、分祀を通じて〈物語的〉対応を人々に喚起していくなかで、地震に強い土地があるとの認識が経験的に獲得されていったのかもしれない。

さて、これまでみたような〈物語的〉対応の一方で、鎌倉期の頃から〈自然科学的〉な地震の捉え方の萌芽がみられると推定されている<sup>11</sup>。江戸時代以降ともなると、地震を〈自然科学的〉に説明できる現象とみなす西洋の思想が実際に紹介されるようになる。しかしながら、当時の〈自然科学的〉認識には未解明な部分も多く偏りがあった。例えば、西洋の地震原因説を紹介した向井元升『乾坤弁説』（1659）にみるように、江戸時代以降の地震認識に関する資史料からは、地震を自然現象と認識しながらも、その原因を地熱に依るとする考え方が多くみられる<sup>12</sup>。当時の〈自然科学的〉認識には、それを補足する〈物語的〉認識が混在していたと考えられる。

そのようななか、当時の人々が地中の現象を捉えるうえで、「筋」や「脈」といった発想があったことも興味深い。例えば二条城の辺りで地割れが起こった<sup>13</sup>文政13年（1830）の京都地震では、「兎園小説拾遺」に「最彼大地震は、わづか煙草一ぷくの間にも不<sub>レ</sub>及、東南の間をさしてゆり通り候よし、其地震のゆり通りにも筋有<sub>レ</sub>之。」<sup>14</sup>（傍点：筆者）と記されている。この記述から、当時、地震被害の大きな場所を連ねた線上のつながりが、地震の「筋」と考えられたことをうかがえる。これと共通する考え方として、三木晴男氏<sup>15</sup>はこれらを「地脈」と捉えていた発想や、地震の「筋」として捉える『闇眠独話』の記述<sup>16</sup>を取り上げている。例えば前者の「地脈」に関しては、京都の地震を有馬の火山活動と結びつけた記述のなかに、「予案るに、有馬山は有馬郡に在り、有馬郡は

撰州の西方、京城の地は、山州愛宕郡中央とすべし、大抵相距る事十四五里程なるべけれど、地脈の通へる所あるにや、丹波も地震強く、又其内に震せざる所もありと聞く、これらも皆地脈の貫通あるなるべし、浪華は浪華より有馬に至て十里、震すること無し、同国にて不審のやうなれども、地脈の通はざる故なるべし<sup>17</sup>（傍点：筆者）とある。つまり、「地脈」がある所では地震の揺れが強く、「地脈」がない所では地震がないとしており、地震の原因に「地脈」が挙げられている<sup>18</sup>。ここから土地に潜む線上のつながりが、地震に関する知識の一つとしてあったことをうかがえる。その背景にある思想として考えられるものに、享保4年（1729）に日本に紹介された中国の天文書『天經或問』<sup>19</sup>が挙げられるだろう。そこでの地震に関する記述から、「如<sub>レ</sub>人筋轉<sub>レ</sub>脈搖<sub>レ</sub>」とあるように、人体になぞらえて地震の現象にみられる線状のつながりを理解していたことが知れる。このようなく物語の認識が、く自然科学的の認識が確立されていくなかで根強くあったものと考えられる。ほかにも、『続史愚抄』に記すように、寛文2年（1662）近江・若狭地震の際には、伊勢神宮・石清水八幡宮・上下賀茂神社・春日大社・日吉大社の五社に加え、延暦寺・園城寺・東寺の三寺に対しても、朝廷より地震祈祷が命じられるなど<sup>20</sup>、地鎮のためのく物語の認識と対策が引き続き行われていた。

一方で、江戸時代におけるく自然科学的の地震対策をみると、「地震口」あるいは「地震戸」と称する脱出口の設置<sup>21</sup>にとどまらず、地震のさいに利用する建築物を設置するようになることがわかる。たとえば文政13年（1830）の地震後に、京都御所の中に避難場所としての地震殿を造営したり<sup>22</sup>、延宝6年（1678）頃の造営と伝える彦根市楽々園の大名屋敷にも地震の間が設置されるなど<sup>23</sup>、江戸時代には地震を避けることができないものとして捉えるようになっていた。彦根市楽々園の地震の間に関しては、昭和31年に着工した復旧工事時の調査により、建設後に幾度か改変を経ているものの、その床構造と小屋裏に補強の工夫がみられることが明らかにされている<sup>24</sup>。これは、たとえば嘉保3年（1096）の地震のさいに堀河天皇が庭の池に浮かべた舟へ避難した<sup>25</sup>ような対策とは異なり、また逃げ込むための仮の場所というだけではなく、直接建築物にも構造を補強することで、平常時から地震への配慮を試みようとした対策である。

このように近世においては、く自然科学的の及びく物語の認識とその対策が、古代・中世からの影響を受けながら、混在していたのである。

## 2. 神社立地と断層—旧官幣大社の事例を中心に

以上の地震認識を踏まえ、神社の立地と土地の性質との関係と、その意義について考察を行う。

地震学の分野では、一般に断層付近には断層崖と呼ばれる斜面が形成され、麓に沿って断層谷が発達することが多いとされている。またそのような場所では、異なる性質の地盤同士が隣接し、特徴的な地形がみられ、硬い岩盤や地層からなる「硬い地盤」と軟らかい地層からなる「軟弱地盤」とが隣接するケースが多い。つまりここから、断層付近に立地する神社は、「硬い地盤」と「軟弱地盤」との境界付近に位置したものが多くことになる。一方、立地する建造物の構造とも深く関わるが、地震の被害が地盤の硬軟と関係あることが知られている<sup>26</sup>。

では果たして、神社の立地は実際にこの二種の地盤の性質と対応していたのであろうか<sup>27</sup>。山本武夫氏は、出雲大社と地震とのかかわりに対する近代の人々の認識について、「銅鳥居を界（境）にして外で地震動を感じても、社殿側の地帯ではあまり感じない」<sup>28</sup>との報告事例を紹介しており、



銅鳥居の外側よりも内側の社殿側の地帯が揺れなかったと認識された事例をうかがえる。これとは別に実際の被害として、北野天満宮では文政13年（1830）の地震のさいに、廻廊の外の石燈籠は悉く折れたが、廻廊の内の石燈籠は一本も折れなかったことが『宝暦現来集』<sup>29</sup>に記されている。これら二つの事例では、神社の建立時に地盤を強化するため突き固めている場所と、それ以外の場所との違いが、地震やその被害に対する人々の認識の違いを引き起こしたものと推測される。いずれにせよこのような体感や被害経験をもとに、当時の人々は社殿が立地する場所に安全な土地のイメージをもち得た可能性を一つ想定できる。

ここで試みに、国内の旧官幣大社にみられる断層と神社との位置を探り（表1）、断層付近に立地する多くの神社が、「硬い地盤」と「軟弱地盤」との境界付近に位置することを考慮することで、それぞれの立地と地盤との関係を探ってみたい。

長野県に加え、京都府及び奈良県を中心とした畿内各地の一部では、伏見稲荷大社や八坂神社、春日大社のように境内直近に断層を有する神社があり、さらに、断層より1km未満と想定される範囲内に立地する神社（表1に白背景で表記）は数十件挙げられる。このうち諏訪大社のように、断層が近くにあるのみならず、沖積地による「軟弱地盤」に立地する神社もあることは無視できない。

断層に対する神社の分布状況に関しては、京都市花折断層沿いに立地する神社や、長野県上伊那北部の断層周辺に立地する神社のように、断層へ沿うように分布している事例も確認できる<sup>30</sup>。いずれの場所でも、異なる地質同士の境界に立地する神社が7割以上みられ、かつ断層沿いの神社が立地する地質として注目すべき「軟弱地盤」が抽出されている。

このように、神社の立地と土地の性質との関係について、断層付近の神社を取り上げて検討した結果、「硬い地盤」だけでなく、一部において「軟弱地盤」などの土地の性質

表1 国内の旧官幣大社と付近の断層一覧

神社		断層	
名称	所在地	名称	神社境内との距離
札幌神社	北海道	地蔵沢	20km未満
月山神社	山形県	—	—
鹿島神宮	茨城県	—	—
氷川神社	埼玉県	綾瀬川断層	5km以上
安房神社	千葉県	鴨川地溝帯北断層	20km未満
香取神宮	千葉県	—	—
日枝神社	東京都	立川断層	20km以上
明治神宮	東京都	立川断層	20km以上
気比神宮	福井県	敦賀断層	5km未満
諏訪大社上社本宮	長野県	大熊断層	境内直近*
諏訪大社上社前宮	長野県	大熊断層	1km未満
諏訪大社下社春宮	長野県	下諏訪断層群	境内直近*
諏訪大社下社秋宮	長野県	下諏訪断層群	境内直近*
富士山本宮浅間神社	静岡県	大宮断層	1km未満*
三嶋大社	静岡県	丹那断層帯	20km未満
熱田神宮	愛知県	天白河口断層	5km以上
建部神社	滋賀県	膳所断層	2km未満*
日吉大社	滋賀県	比叡断層	500m未満*
多賀大社	滋賀県	彦根断層	1km未満
近江神宮	滋賀県	比叡断層	500m未満*
賀茂別雷神社	京都府	弓槻—笠峠	1km以上5km未満*
賀茂御祖神社	京都府	清水山西	1km以上5km未満*
石清水八幡宮	京都府	八幡断層	500m未満*
松尾大社	京都府	椋原断層	境内直近*
平野神社	京都府	清水山西	1km以上5km未満*
伏見稲荷大社	京都府	稲荷山断層	境内直近*
平安神宮	京都府	清水山西	500m未満*
八坂神社	京都府	清水山西	境内直近*
白峯神宮	京都府	清水山西	2km未満*
住吉大社	大阪府	長居	500m未満*
大鳥神社	大阪府	長居	500m未満*
枚岡神社	大阪府	生駒断層	1km未満
生国魂神社	大阪府	長居	5km未満
水無瀬神宮	大阪府	西山断層	1km以上2km未満*
伊弉諾神宮	兵庫県	一宮俣曲	1km未満
広田神社	兵庫県	芦屋断層	500m未満*
大神神社	奈良県	羽曳野撓曲	境内直近*
大和神社	奈良県	羽曳野撓曲	1km未満*
石上神宮	奈良県	羽曳野撓曲	境内直近*
春日大社	奈良県	奈良坂撓曲	境内直近*
広瀬神社	奈良県	大和川断層帯	1km未満
龍田大社	奈良県	大和川断層帯	1km未満
丹生川上神社上社	奈良県	千股断層	10km未満
丹生川上神社	奈良県	千股断層	5km未満
丹生川上神社下社	奈良県	千股断層	10km以上
橿原神宮	奈良県	葛城東麓断層	5km以上
吉野神宮	奈良県	千股断層	5km未満
日前神宮・國懸神宮	和歌山県	根来断層	5km未満
竈山神社	和歌山県	根来断層	5km以上
熊野本宮大社	和歌山県	高尾山南方	5km以上
熊野速玉大社	和歌山県	—	—
丹生都比売神社	和歌山県	中央構造線	10km未満
出雲大社	島根県	矢尾町付近	5km未満
赤間神宮	山口県	小倉東断層	10km以上
宮崎宮	福岡県	警固断層	5km未満
香椎宮	福岡県	大谷	5km未満
宗像神社辺津宮	福岡県	東一大井	1km以上
宗像神社中津宮	福岡県	東一大井	10km未満
阿蘇神社	熊本県	産山断層群	5km未満
宇佐神宮	大分県	—	—
宮崎神宮	宮崎県	石久保—上倉谷	10km以上
鶴戸神宮	宮崎県	男鈴山東麓	20km未満
鹿兒島神宮	鹿児島県	崎森	5km未満
霧島神宮	鹿児島県	高千穂峰南断層	5km以上

※『神社名鑑』（神社本庁発行、1963）所収の旧官幣大社とその神社名を用いた。また二つ以上の社殿が離れた場所にある神社は別表記とし、同じ場所にある二つの神社は一つの表記とした。断層の資料は『新編日本の活断層 分布図と資料』（活断層研究会編、東京大学出版会、1991）を参照とし、\*表記の距離は各地の「二万五千分の一都市圏活断層図」により補足した。

を示す指標となる神社もあることがわかる。つまり、神社に安全な土地のイメージを求めていた事例のみならず、「軟弱地盤」上に立つ神社のように、人間にとって注意すべき土地のイメージを喚起した神社もあったと考えられるのである。

### 3. 神社立地と地盤—八坂神社の場合

ここで、「軟弱地盤」にみられる神社の興味深い事例として、京都市花折断層沿いの八坂神社をとりあげ、その立地の意味について考察したい。それにあたりまず、過去に京都を襲った地震のうち、被害実態が明らかとなっている事例から触れておきたい。

まず京都に被害を及ぼした過去の地震と被害実態に関しては、元暦2年（1185）の京都地震と寛文2年（1662）の近江・若狭地震、また文政13年（1830）の京都地震についての先行研究<sup>31</sup>がある。これらをもとに、過去の地震被害と地盤との関係を見てみると、まず文政13年（1830）に京都を襲った地震では、地変の場所が崖や堤などの軟弱な堆積地であり、そこでは多くの被害があったことがわかる<sup>32</sup>。寺社の被害としては、『宝暦現来集』に「寺社潰三十ヶ所」と記されており、たとえば清水寺音羽の滝は地震後の大雨によって崩れたことが知れる<sup>33</sup>。また、寛文2年（1662）の近江・若狭地震では、京都盆地北部よりむしろ、伏見や淀など京都盆地南部の「軟弱地盤」の地域に大きな被害があった<sup>34</sup>。

さて、京都市中心部に目を向けよう。断層と神社の位置関係を俯瞰してみると、市中心部を通過する花折断層の南部周辺地域では、断層付近の神社が断層沿いに分布する様相を呈している（図1）<sup>35</sup>。このことから、断層などの土地の性質と神社の立地とのあいだに、有意な関係があるものと察せられる。

そこで、断層沿いのこれらの神社が立地する地盤について、地質調査所発行（2000）の「花折断層ストリップマップ」をみてみると、断層周辺の神社景観を形成する土地の性質は、地質学でいう基盤岩と被覆層という地質条件によって区別して考えることができる。また「軟弱地盤」に着目すると、被覆層のなかでも、基盤岩の麓で隆起した大阪層群が、土地の性質と神社の立地とのかかわりを考察する上で注目すべきものと考えられる（図2）。

この被覆層に立地し、過去に地震被害が知られる神社として、八坂神社が挙げられるの



図1 花折断層南部周辺地域の断層及び神社位置図



である。天正13年（1585）の地震では、『八坂神社文書』によると神社拝殿と鳥居が破却した<sup>36</sup>。また寛文2年（1662）の地震のさいに八坂神社の石鳥居が崩壊した様子は、『続史愚抄』にみられるほか<sup>37</sup>、仮名草子の『かなめいし』のなかでは絵図とともにその逸話が記述されているほどである<sup>38</sup>。

八坂神社の境内は、被覆層の段丘堆積物に位置する。その周辺を含めた断層及び地盤と神社の立地をみると、境内西側斜面の参道と平地との境には断層が位置しており、そこには境内側の段丘堆積物と平地側の沖積層との地質の境界が形成されている（図2）。このように、八坂神社の境内を境に、異なる地質がせめぎあい、かつ断層の端部が存在している。このことからひるがえって、八坂神社は断層や地盤といった土地の性質が、神社の景観として表出した事例とも理解できるのである。



図2 八坂神社周辺の断層及び地質模式図（『花折断層ストリップマップ』地質調査所発行(2000)より引用改変）

#### 4. 土地の性質からみる環境指標の示す範囲—八坂神社と粟田神社の場合

八坂神社の背後には、明治19年12月25日の府告示により公園地として指定された円山公園がある。ここは八坂神社の境内にくわえ、山中腹から麓に位置する安養寺、長楽寺、双林寺の各境内地の土地に端を発し、公園地として指定されている<sup>39</sup>。この円山公園と、さらに背後にある安養寺や長楽寺が立地する斜面林との境にも断層が知られ、その北端にあたる要所には粟田神社が立地している（図3）。華頂山山腹にあるその鎮座地は、東海道や東山道につながる交通の要衝でもあった。その周辺を含めた断層



図3 粟田神社周辺の断層及び地質模式図（『花折断層ストリップマップ』地質調査所発行(2000)より引用改変）

及び地盤と神社の立地をみると、山麓から中腹に至る参道と境内が大阪層群の上に形成されており、背景林である華頂山の基盤岩と境内との境界に断層が位置する一方で、山麓にある急傾斜の参道登り口は、平地側にある沖積層との境界となっていることがわかる。すなわち、本殿などの建造物が立地する境内のみならず、参道および背景林を含めた社領全体の景観に、断層や異なる地質が隣接しているという土地の性質が表出していることを読み取れる。これらは神社の景観が社殿を取り囲む境内のみならず、参道や背景林などの周辺環境とともにまとまりとして捉えられることをあらわしている。このまとまりこそ、環境指標の一つと言えるものである。

ここで改めて、神社が立地する土地の性質に対する人々の認識を探ってみたい。過去の地震被害などを受けて、当時の人々がその土地を地震に強い土地であると経験上認識し、地震信仰をともなった鹿島神宮が分祀された可能性については先述した。このような事例は、その土地が地震に強い土地であるとの認識に基づき、人々が崇める神社となる。しかし一方で、八坂神社のように「軟弱地盤」に立地し、地震被害を経てもなお現存する神社が存在した。しかもその土地の性質は、神社の景観を決定づける重要な役割をもつものとして看過できないのである。

## おわりに

本研究では、断層沿いに立地する神社の景観をもとに、神社の立地とその意義について検証した。まず、過去に起きた地震に対する当時の人々の認識と、神社の立地との関係に見られる特質について、決して網羅的な検討とは言い難いものの、整理すると次のようになる。近代以前の地震認識の事例を瞥見すると、土地の性質は非科学的な伝承や神話などに起因する〈物語的〉なものが多かった。興味深いのは、このイメージが抽象的なものにとどまらず「筋」や「脈」といった具体的な線上のつながりのイメージを喚起させるものとしても理解されていたことである。

さらに地震認識と神社の立地との関係をみるにあたって、国内に現存する旧官幣大社を事例として考察した結果、断層付近の「軟弱地盤」に立地する神社の存在も無視できないことを指摘した。神社の立地と土地の性質との関係について、断層付近の神社を取り上げて検討した結果、一部において「軟弱地盤」などの土地の性質を示す指標となる神社もあると推察される。つまり、人間にとって注意すべき土地の性質を抑える神社もあるものと考えられる。今後の検討課題としたいが、おそらく、〈自然科学的〉立場と〈物語的〉立場とのバランスいかんで、神社の立地が決定されていたものと推察されよう。

以上より、「軟弱地盤」に立地する神社の意義を考察するため、歴史的都市を断層が貫く具体的な事例として八坂神社を中心に、京都市花折断層南部周辺地域に立地する神社を取り上げて検討を試みた。そこでは本殿などの建造物が立地する境内のみならず、参道および背景林を含めた社領全体の景観に、断層や異なる地質の隣接地という土地の性質が表出していることを読み取れた。これらは神社が社殿を取り囲む境内のみならず、参道や背景林などの周辺環境とともに一体的に保持されることで、継承が可能となる環境指標の一つとして重要な意義をもっていると考えられるのである。

## 謝辞

本研究を遂行するにあたり、平成20年度研究開発助成(一般研究課題)を賜った財団法人日比科学技術振興財団に深く御礼申し上げます。また、名古屋工業大学新屋雄基君には図版作成にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。

## 註

- 1 是澤紀子・堀越哲美「景観としての神社の立地にみる信仰の場と自然環境の関わり—京都市花折断層周辺の神社を事例として」(『日本都市計画学会学術研究論文集』39, 2004)  
是澤紀子・田中稲子・堀越哲美「景観としての神社にみる自然環境保全の在り方—京都市文化財環境保全地区を事例として—」(『日本建築学会環境系論文集』598, 2005)



- 2 例えば文化財保存の分野では防災に向けて国宝文化財データベースと断層データベースとの連携による地震危険度評価が取り組まれている。二神葉子・隈元崇「文化財防災へのGISの利用—文化財の地震危険度評価を中心に」(『文化財の調査研究および保護に対する地理情報システムの利用』独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター, 2005)を参照のこと。
- 3 景観の基礎資料を提供する土地利用の研究では, 1970年頃以降, 植物学者による「自然環境をできる限り有効に利用し, 自然のもつ多様性を生かしつつ, その利用の永続性を保証しようとする」ための「自然立地的土地利用」の考え方とともに, 地形, 地質, 気候, 植生等による総合的な把握が試みられている。井出久登「自然立地的土地利用の思想」(『応用植物社会学研究』7, 1978)を参照のこと。
- 4 野本寛一『神々の風景—信仰環境論の試み』(白水社, 1990)
- 5 水野章一『中世の人と自然の関係史』(吉川弘文館, 2009), 北原糸子編『日本災害史』(吉川弘文館, 2006)に初出。
- 6 『古事類苑』(地部五十, 古事類苑會, 1936)
- 7 山本武夫「史料吟味の必要性」(萩原尊禮編『古地震—歴史資料と活断層からさぐる』東京大学出版会, 1982)
- 8 前掲7によれば, 地震による改元として, 承平八年(938)京都地震をはじめ, 天延(973), 貞元(976), 永長(1096), 文治(1185), 慶長(1596), 天保(1830), 安政(1854)が知られる。
- 9 『神道大系 神社編22』(精興社, 1984)
- 10 都司嘉宣・山本賢「地震神としての鹿島信仰」(『歴史地震』8, 1992)
- 11 前掲7を参照のこと。地震学者の今村明恒氏は「災害除け」(『地震』第1輯11-11, 1939)のなかで, 慶長16年(1611)の会津地震の際には地震による異変が領主の失策の一つとされたが, この迷信は, 後に江戸が地震活動の中心となったことにより続けていくことができず, 地震を自然現象と見るようになったと記している。
- 12 前掲7
- 13 「宝暦現来集」(『近世風俗見聞集3』国書刊行会, 1913)
- 14 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成第2期第3巻』(日本随筆大成刊行会會, 1928)
- 15 三木晴男『京都大地震』(思文閣出版, 1979)
- 16 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第4巻』(東京大学地震研究所, 1984)
- 17 「震災予防調査会報告46」(文部省震災予防調査会, 1904)
- 18 『日本国語大辞典』には地震と関連した記事は見られない。いつ頃から地震と地脈が関連づけられるようになるかは不明であるが, 今後の検討課題としたい。
- 19 西川忠亮編『西川如見遺書』(1898-1907)を参照のこと。西川如見の子忠次郎(正休)が訓点を施して出版したことより広まったことは, 石本巳四雄氏の「日本古来の地震原因観」(『地震』第1輯3-1, 日本地震学会, 1931)に詳しい。
- 20 黒板勝美・国史大系編修会編『新訂増補 国史大系15』(吉川弘文館, 1966)
- 21 齋田時太郎「江戸時代の耐震構造『地震の間』に就て」(『地震』第1輯13-12, 1941)
- 22 齋田時太郎「京都御所泉殿及地震殿について」(『東京大学地震研究所彙報』18, 1940)

- 23 齋田時太郎「彦根城楽々園地震の間について」(『東京大学地震研究所彙報』18, 1940)
- 24 近藤豊「彦根市楽々園地震の間の復旧工事について—江戸時代の耐震考慮—」(『生活文化研究』7, 1958)
- 25 戸田芳美『日記・記録による日本歴史叢書 古代・中世編5中右記 躍動する院政時代の群像』(そしえて, 1979)
- 26 北澤五郎「地盤の硬度と震害」(『地震』第2輯1-2, 1948)
- 27 寛文2年(1662)近江・若狭地震における災害要因を探った西山昭仁氏らによる『1662寛文近江・若狭地震報告書』(中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会, 2005)では, 被害程度が高かった場所は「軟弱地盤」である湖岸の近世の埋立地であったことが示されている。さらに彼らが, 古代や中世に遡る寺社などでは大きな被害を受けていないと報告していることに注視しておきたい(小松原琢・西山昭仁「寛文二年(1662)近江・若狭地震における都市被災地の社会的・自然的条件—京都盆地・伏見の事例—」『歴史地震』22, 2007)。同時に, このことが古代や中世に遡る寺社が「硬い地盤」に立地するということを示すわけではないだろうことにも考慮しなければならない。鹿島神社の事例では, 結果的に地震や津波に対して「強い」土地にある鹿島神社だけが淘汰されて現存している可能性も示されていたことが留意される(前掲10)。つまり, 記録もなく現存しない寺社は検討の対象とはなり得ず, 寺社は淘汰された結果現存しているという可能性もあるので, 過去に大きな被害を受けて失われた寺社の存在も否定できないのである。
- 28 山本武夫「元慶四年の出雲地震—規模の見直し」(萩原尊禮編『古地震—歴史資料と活断層からさぐる』東京大学出版会, 1982)
- 29 前掲13
- 30 前掲1, 拙稿(2004)及び以下を参照のこと。  
加藤三紀彦・是澤紀子・堀越哲美「長野県上伊那北部における断層周辺の神社の立地景観に関する考察」(『日本建築学会学術講演梗概集』, 2009)
- 31 前掲15のほか代表的なものとして以下の論考があげられる。  
西山昭仁「元暦二年(1185)京都地震の被害実態と地震直後の動静」(『歴史地震』14, 1998)  
西山昭仁「寛文2年(1662)近江・若狭地震における京都での被害と震災対応」(『京都歴史災害研究』5, 2006)
- 32 前掲15
- 33 前掲13
- 34 前掲31, 西山(2006)
- 35 前掲1, 拙稿(2004)より引用。各断層の位置は「花折断層ストリップマップ」(吉岡敏和他編集, 地質調査所発行, 2000)を使用し, 神社および寺院は, 国土地理院発行の2万5千分の1地形図に記載されたものを示している。
- 36 東京大学地震研究所編『新収日本地震史料 第1巻』(東京大学地震研究所, 1981)
- 37 前掲20
- 38 朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成 第十八巻』(東京堂出版, 1996)
- 39 丸山宏「京都円山公園成立前史」(『日本造園学会研究発表論文集』2, 1984)